奥山実の

一（いち）言（ごん）半（はん）句（く）

vol.11

郵政民営化の陰の勢力

荒野の望み

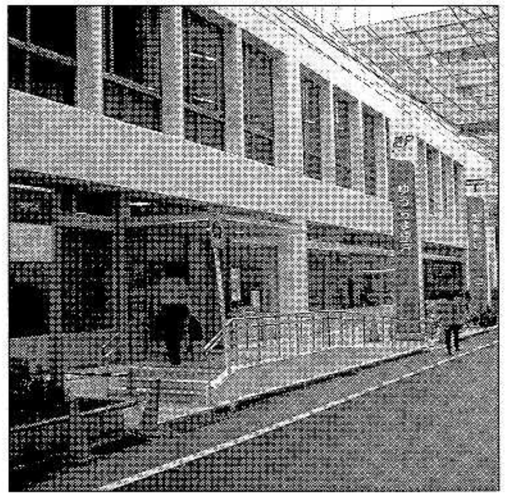
遂に郵政民営化が始まった。しかし日本国民は、これを手放しで喜んでいる訳ではない。何か大きな「不安」を感じている。それは最近の「年金問題」でもおわかりのように、政府と官僚のあまりのズサンさに、国民はあきれ果て、まさに「あいた口が塞さがらない」有様だからである。そこで、「お上（かみ）」のやることに、疑心暗鬼、全く信用がおけないのだ。

周知の如く、郵政民営化を徹底して強引なまでにおしすすめたのは、小泉元首相と、郵政民営化・経済財政担当大臣を務めた竹中平蔵元大臣である。この二人によって郵政民営化が実現したと言っても過言ではない。

ところが、この竹中平蔵と言う男は、人間として極めて問題の多い人物なのである。その一つは、一九八四年度のサントリー学芸賞を受賞した竹中の『研究開発と設備投資の経済学』は、実は鈴木和志教授（明治大学）との共同研究であったものを、単独で発表して名誉を一人占めしたと言うモラルの問題である。それは月刊誌『現代』（二〇〇五年十二月号）で暴露されており、日本の経済学者の間では、かなり知られた出来事らしい。

このように、モラルに問題のある彼は、二〇〇五年八月二日の「参議院郵政民営化に関する特別委員会」に於いて、明らかに「偽証」ととれる発言をしている。

それは、「年次改革要望書」に関わる問題であるが、年次改革要望書とは、一九九三年に、当時の宮沢首相とクリントン大統領の首脳会談で導入が決定されたもので、両国がそれぞれ要望を提案出来ると言う、一見公平に見えるのだが、実体は、殆んどアメリカ側が一方的に要望を押し付けて来る。そしてそれは、よくもここまで一つの主権国家に対して言えるものだと思うほど傲岸不遜なものである。



東京銀行（現・三菱東京UFJ銀行）で国際金融の現場にいた関岡英之氏は次のように語る。

> 過去十年間、日本で進められてきた「改革」のかなりの部分が、日本政府への米国政府の『年次改革要望書』の要求を忠実に反映したものだ。〇五年国会で成立した新会社法しかり、改正独禁法しかり、そして郵政民営化法もまたしかりである。（『奪われる日本』講談社現代新書10・11頁）

そして知るべきことは、ここ数年間、アメリカが最も強く要望して来ていたのが、「郵政民営化」なのである。

何故それが分かるかと言えば、アメリカは堂々とその「年次改革要望書」の日本語版を、在日米国大使館のウェブサイトに公開しているからである。だから誰でも読める。つまりアメリカは正々堂々と日本を支配しているのである。これでは完全な属国である。

さて竹中の「偽証」ともとれる発言についてであるが、前述の参議院の特別委員会で、外圧によって郵政民営化をすすめているのではないか、と言う質問に対して、竹中は、

> 「郵政の問題につきまして外国の方から直接要望を受けた事は一度もございません」（『文藝春秋』二〇〇五年十二月号一一三頁）

とはっきり答
る。つまり「年
要望書」は、日
あって私個人に
い、とうまく逃
もりであったろ
ころが、全く皮
とに、この竹中
の直後、国会で
個人に宛てられ
ート・ゼーリッ
商代表部長の書
開されたのである

その書簡のコ
ジャーナリスト
栄一郎氏が所有
り『文藝春秋』
の一部が公開さ
る。（二〇〇五年
号）それはれっ
た「郵政民営化の
であって、なん
化後のことまで
れている。例えば

二〇〇七年

商業主義が生んだ「偽物」

結婚式教会の誕生

五十嵐太郎著
春秋社
1995円

近年、日本各地に巨大教会堂が多く出現しているらしい。巨額の費用により教会建築の様式と十字架を有し教会の名称が冠されている。しかし、不思議なことにそれらは教会によって建てられた会堂ではないという。その正体はキリスト教式の結婚式を行なうために建てられた商業建築である。それを著者は「結婚式教会」と命名した。

この本は「キリスト教式結婚式場」の建築、すなわち教会の存在しない「教会建築もどき」に関する研究の書である。

著者の五十嵐太郎氏は日本建築界の第一線で活躍される建築批評家。クリスチャンではない。内容は建築的な考察から日本の文化、宗教観におよぶ。

信仰のある読者にとっては、教会建築、教会の結婚式、宣教のあり方などについて示唆を受けられるかもしれない。

ちなみに、この本で使われる「教会」という言葉は通常「教会建築」をさしている。混乱しないよう少々注意がいる。

紹介される「結婚式教会」の数々は中世ヨーロッパのゴシックの教会堂等をモチーフにしているが大半はオリジナルに及ばぬ稚拙なデザインのおそまつなものらしい。しかし大衆受けする要素は備えている。また、著名な建築家の手になるものもあり、それらは見るべきデザインをもっているという…。

信仰をもつ建築設計者の目で見ると、それらほとんどが醜悪さを感じさせる。

やはり建築とはそれを創った人々の心を表す芸術なのだ。いわゆる良いデザインとされるものでも、商業主義で建てられた建築は心に感動を与える力はないということだろう。「結婚式教会」とは教会堂と形態は似ていても、別物であり、それは人を喜ばすための疑似体験の装置である。つまりアミューズメント・テーマ・パークと同じなのだ。

著者が堂々たるゴシック様式の本物の教会堂を見て、「結婚式教会」に錯覚するくだりは印象的だ。教会らしいと思われるゴシックなどの様式は、一般大衆にイメージを消費しつくされ、もはや単純にその様式だけではキリスト教会の証としての力をもっていないことがうかがえる。

このことは教会が実際に建築を計画する場合、考慮すべき事象だろう。

「結婚式教会」は偽物である。にもかかわらず大衆によりそれに本物性が求められ、本物の教会での挙式は聖書を学ばされ面倒なので敬遠されるという…。

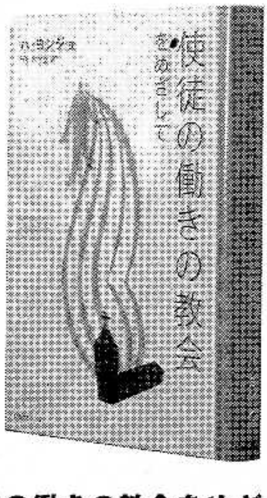
この世は虚構が現実に入り込み、実社会自体がテーマパークと化しているわけだ。ここではキリスト信仰の「宗教性」だけが快楽のテーマとして選ばれている。神は求められていない。

著者はこうした状況を否定も肯定もせず、信仰に立脚せず建築的視点を通して読み解こうとされている。しかし、精神を伴わない建築の評価というものがありえるのだろうか。また「真の教会は共同体の総意として存在する」という定義が唐突に出てくるがこれにも疑問符がつく。（永野卓建築設計事務所　建築家・永野卓）

リバ新堂本舗

読んで
評して
示されて

使徒の働きの教会をめざして



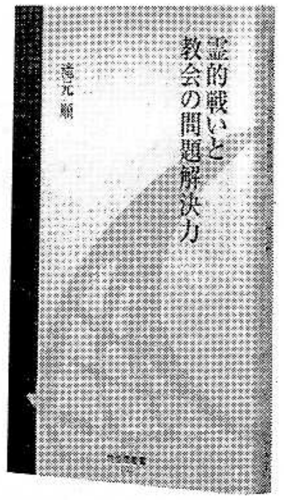
ハ・ヨンジョ著
Duranno書院　1905円

日本の教界でもすっかり有名になったオンヌリ教会主任牧師が書く骨太な教会論と牧会哲学。「ラブソナタ」など華やかな側面が注目されがちな同教会だが、その根底には御言葉と聖霊に徹底的に従い、使徒の働き29章を記すという覚悟があることが分かる。

特徴は、主イエスの語った観念的な教会論と、使徒の働きに見る実際的な牧会哲学という二つの観点から考察している点。著者は「教会論はすべての教会で同じでなければならないが、牧会哲学は教会によって違うことが有り得る」と説き、オンヌリ教会独自の召し（文化伝道など）を踏まえつつ、宣教志向の教会の姿を紐解いている。

著者の自叙伝的内容も多い。

霊的戦いと教会の問題解決力



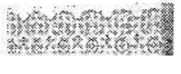
滝元順著
地引網出版 840円

すべてのキリスト者が「兵士」である。キリスト者はこの世においては平和を追求するが、霊的な領域では戦うため、「キリスト・イエスのりっぱな兵士」（Ⅱテモテ2・3）として召されている。

この霊的な戦いにおいて、誰が敵なのかをしっかりと見極めることは重要である。（残念ながら現実には起きていることではあるが）キリスト者の同士討ちにならないようにするためにも、敵の存在についての認識と理解が必要である。そこに「私たちの格闘」の本質があるからだ（エペソ6・12）。

そして、聖書
ているように、
ある悪魔は「策
している。その
向かうこと」が求
ペソ6・11）。

この霊的戦い
いく上で必読の
氏の『霊的戦い
決力』は、教会、
が遭遇するさま
な実相を明らか
はりめぐらす悪
ように進めていく
を示している。
験と鋭い洞察力
ので、霊的戦いの
則だけでなく、
もしっかりと言

この日本の実情
の大きな特徴で
南米の実際が語
れまでも読むこと
し、読者を日本